視覚支援学校の高等部生徒に対する「生きがい感」についての授業実践の検討

― 視覚障がい者に対する「生きがい感」のアンケート調査とQOLの視点を取り入れた授業実践 ―

学籍番号　249506
氏　　名　竹内春乃介
主指導教員　正井隆晶
副指導教員　西山健

１．本研究の背景と目的

筆者は、学部生時代に近藤・鎌田（1998）による「大学生を対象とした31項目による生きがい感スケール」を基にして視覚障がいのある大学生を対象としてアンケート調査に取り組んだ。アンケート調査の結果から、「生きがい」は視覚障がいの有無と必ずしも関連しないことが示唆され、むしろ“障がいがあること”や“障がいがあるという現実の受容”が「生きがい」について考える契機となったことが示唆された。一方で、視覚障がいがあることで“困り感”や“制限”を感じている現実があることも示され、このことから、自己の「意欲」や「現状満足感」を高めることが、自己の人生をより良く捉えることや「生きがい」を感じることに繋がり得ることも示唆された。そのため、定義することが難しい「生きがい」そのものの獲得の検討ではなく、自己の「意欲」や「現状満足感」を高める視点からの研究の継続の必要性が考えられた。そこで、本研究においては、福本（2005）が、「生きがい」とQOLの連関性を示唆していることや、文部科学省（2020）が、ICT教育の充実に関わって、「生涯にわたって生活の質（Quality Of Life：QOL）を大きく向上させることを考慮する」と指摘していること等を踏まえ、QOLの視点の適用と、実習校を対象として実施する「生きがい感」についてのアンケート調査結果を反映させた、視覚障がいのある高校生に対する「生きがい感」についてのより良い授業実践について検討していくことを目的とした。

２．基本学校実習Ⅲ・Ⅳ

基本学校実習Ⅲでは、小学部での実習において、児童の好きなことや得意なことを用いている授業があった。また、高等部における実習では、重複障がいのある生徒に対しても、好きなものや得意なこと、夢中になれるものを探していくことで、意欲を引き出すことや楽しいことを発見することに繋がる授業実践があった。これらの授業実践から、児童生徒の好きなことや得意なこと、夢中になれるものを探していくことで、「生きがい」と表現することはなくても、意欲に結び付けることが、「生きがい」を見出すことに繋がる可能性があることが考えられた。また、基本学校実習Ⅳでは、小学部での実習において、体験的な学習の実

践が児童の興味関心の喚起に繋がることを学ぶとともに、“児童の興味関心の喚起が好きなことや得意なことの発見に寄与する可能性”が考えられた。また、高等部における実習では、障がいのある生徒の将来に目を向けた授業実践の重要性を認識し、“社会を知る”機会の提供と“自立して生きる”に結び付く学びが、生徒のQOLの向上等に繋がり得ることが考えられ、“「生きがい感」についての授業実践”への大切な視点を得ることができた。

３．発展課題実習Ⅲ・Ⅳ

発展課題実習Ⅲでは、実習校の視覚障がいのある教員、及び、専修部の学生を対象として、『「生きがい感」に関するアンケート調査』を実施した。アンケート調査の結果から、「生きがい感」を阻害する要因等について、ICFの視点（個人因子と環境因子）から分析できる可能性が考えられ、自己の人生をより良く捉えることや「生きがい」を感じることに繋がる考え方を伝えることができる可能性が示唆された。そこで、“「生きがい感」についての授業実践”の重要な骨子として、①ICFの視点（個人因子と環境因子）を取り入れることと、②自らの生活、人生の現在の満足度やQOLの向上等に関心を寄せるきっかけとなる授業とすることが、重要な視点として得られた。これらのことを踏まえて、発展課題実習Ⅳでは、高等部１年の生徒（３名）を対象に、本授業実践前の事前授業２回を含む３回にわたって、“「生きがい感」についての授業実践”に臨んだ。授業においては、定義することが難しい「生きがい」そのものに代えて、「意欲」や「現状満足感」を高める視点として、ICFの考え方やQOLの向上等を取り入れる工夫を取り入れたことにより、本授業の事前事後の生徒に対するアンケート調査の結果から、“生徒が自身の生活や人生に生かせるのではないか”と思考するきっかけを与えたことが示唆される結果が得られ、自己の「生きがい」について考えていくきっかけを与える授業実践の必要性とその意義を成果として確認できた。

４．研究全体を通しての成果と今後の課題

本研究における成果として、２点が考えられる。１点目は、“「生きがい感」についての授業実践”を通じ、定義することが難しい「生きがい」そのものに代えて、ICFの考え方やQOLの向上等を取り入れ、自己の「生きがい」について考えていくきっかけを与える授業実践の重要性が示唆されたことが挙げられる。２点目は、“障がいのある子どもの好きなことや得意なことを生かした授業実践が将来的に「生きがい」を見出すことに繋がり得る”という示唆を得たことから、学部を超えて全ての教員が、児童生徒の「生きがい」やQOLの向上等について考える必要があると示唆されたことが挙げられる。つまり、児童生徒の実態に応じる必要があるものの、どの学部の教員であっても、児童生徒のより良い生き方や「生きがい」のある人生に意識を向け、日々の教育を行っていく必要性が確認できたと考える。

今後の課題としては、２点が考えられる。１点目は、学部生時代に取り組んだアンケート調査も、本研究で実施した『「生きがい感」に関するアンケート調査』においても、対象となる母数が少なく、回答者の数が６人に留まったことが挙げられる。今後は、より幅広い年代や個人の背景等を取り入れた調査を実施する必要があると考えられる。２点目は、アンケート調査の対象者の障がいが視覚障がいに限られていることが挙げられる。そのため、他の障がいでの「生きがい」についての関係性は検討できていない。今後は、障がい別で、その障がい固有の“困り感”や“制限”が「生きがい」に及ぼす影響について精査していく方法を検討していくことも課題として考えられる。